



# 日本の文学

71

井上 靖

中央公論社

日本の文学 71

©1964

---

井上 靖

昭和39年11月5日初版発行  
昭和48年5月20日28版発行

---

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 株式会社トープロ  
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂  
口絵写真印刷 株式会社トープロ  
本文用紙 本州製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

黯い潮	5
天平の薨	104
敦煌	209
獬 銃	353
玉碗記	395
ある偽作家の生涯	412
洪水	445
補陀落渡海記	460
小磐梯	480



年 解 注  
譜 説 解

口 挿  
絵 画

河上徹太郎

525 512 499

「敦煌」

橋本明治

「歸い潮」「狐銃」「ある偽作家  
の生涯」「小磬梯」

小磯良平

「天平の夢」「敦煌」「補陀落渡  
海記」

橋本明治

井  
上  
靖



第一章

二日の休暇をとって、その二日を沼津の佐竹雨山さたけりゅうざんの家で、久しぶりで家庭的な雰囲気ふんいきの中に過ごして来た速水が、小さなポストンバッグを持って、有楽町のK新聞社の三階の編輯局しゅうぎんきょくに姿を現わしたのは、もうかれこれ十時に近かった。

有楽町の省線のホームに降り立った時、長い記者生活の習性で、速水はホームの前に立ちはだかつている新聞社の建物に眼を遣やつたのだが、三階の窓というどの窓からも、まだ宵よの口のような明るい電気の光が洩もれていた。その時、直観的に何かあったのではないかという気持はしたのだが、編輯局の入口で、社会部の陣取ちんきりっている奥の方の一角に、二、三十人の社員が雑然と散らばって、その中に部長の山名やデスクの連中の姿がまじっているのを見るまでは、実際のところ大したこととは考えてい

なかつた。

編輯局へは行って、なんとなく事件時特有のものものしい空気に触れ、こいつあ、相当大きな事件だなど思った瞬間、真っ先に彼の頭を占めたのは、国鉄整理からんで、組合側がストライキを発令し、政府がそれに対してついに非常事態宣言を出したということであった。それ以外に、これだけの陣容が居残る場合はちよつと考えられなかつた。

「何があつたの？」

速水は鞆かばんを長く一列に並べてある社会部の机の一番隅すみっこに置くと、そこにいた若い警察廻りの記者に声をかけた。

「下山総裁が行方不明ゆきかたふみょうになつたんです。号外見ませんでした？」

「見ない。いま沼津から帰つたばかりだ」

事件は彼が想像したものとは違つていた。何か陰惨なものを含んだ暗い感じが、彼の心に押しかぶさつて来た。若い記者は、机の上に散らばっている新聞をあちこちめくつて、どこからか一枚の号外を探し出してくれた。

「自社だけです。号外を出したのは」

S社もO社もU社も号外はちよつと躊躇ためらつた形だったが、自社は部長の山名一人の判断であつさり決まつてしまつたという。



速水はその号外に眼を通し、それからそこに散らばっている朝刊の仮刷りの記事を、とびとびに拾い読みしていると、部長の山名が少し酒のはいつている赤い眼をして、

「いつ帰って来た？」と彼に近づいて来た。

「たったいま。二日あけると、これだからね。すさまじい世の中だ」

山名は、そう言う速水の横から、速水の持っている新聞をいっしょに何となく覗き込んでいたが、

「どう？ これ、やってみないかい」

持前の抑揚のない静かな口調で、山名は紙面から反らした視線を、編輯局の隅の方に投げたまま言った。

「あいにく、警視庁の主任記者が北海道へ行っていて空いているんでね。しかし、警視庁の方は筧と東野村がいるから、どうにか行くだろう。やって貰いたいのには警視庁じゃあないんだ。デスクの方が三人とも手いっぱい、これが大きく発展すると、そこからは人が割けない」

山名は、人を説得する時いつもそうであるように、粘っこい廻りくどさで、ぼそぼそした口調で言った。

山名のいうことは、なるほどその通りだった。大きい事件では、帝銀事件、平事件が未解決のままに残っており、それにソ連からの引揚者の各地における乗車拒否、国鉄整理の強行、それに対する全国各地の組合の、表面

静かだが、底に嵐を孕んだ不気味なざわめき、どれ一つとして眼をはなせるものはなかった。それでなくてさえ副部長三人が、この上新しい事件を受け持つということ

は、実際問題として不可能なことだった。

しかし山名が速水にこの事件を主任記者として統轄しろというその言葉の底には、また別の意味も含まれていた。それが速水にも、多少心に沁みる痛さで感じられるのであった。

速水卓夫が四十を越した年配で、いまだに社会部の遊軍記者として、派手といえは派手、のんきといえはのんきだが、その年齢からすれば、それにそろそろ侘びしさの影の付きまといつて来る役名のないポストに納まっていることは、日ごろからそれとなく心を使っている山名の、いかにも山名らしい人情的な気の配り方だった。いつまでも、ぼやぼやしているな、こころでひと花咲かせろよ。山名はこう言いたのである。

速水の同期生の中では、速水が一番遅れている。すでに彼の仲間から何人かの部長も出ている。いまだにひらの記者として、しかも早急にはどうにもなりそうもないぱつとしない澱んだ雰囲気、速水はいつともなく身の廻りに形成していた。新聞記者として生涯をやり通すのか、やり通さないのか、ちょっと判断に苦しむような、熱情を喪った妙にそうけた印象が、彼のどこかにはあつ

た。チェックの背広などを、無造作な恰好で着こなして、よく見るとおしやれたが、遠目にはその崩れたところだけが浮いて見えた。酒を飲むと、ひどく横顔が淋しくなる。酒を飲まないでも、一人きりでホームの外れで電車を待っている時などの背後姿は、風にも吹かれていような妙にたよりない印象を人に与えた。こうした彼の風貌姿態が、新聞社のような、太い線と荒いタッチの間が強引に人を排してのさばって行く社会では、一割も二割も損だった。

仕事は緻密で、そつはなかったが、躰で押して行くような熱情的な力はなかった。どこからか絶えず、隙間風に吹かれているような、いつも醒めたところがあった。そんなところが、社会部記者として致命的といえれば致命的だった。

二十代に一度結婚したが、二、三年でそれに破れると、あとは今日まで独身で通している。彼の何ものかが欠けた印象は、そんなところから来るものとも、逆にそうしたものが、彼に人並みの家庭を持たせないとも見られた。彼は部でも、多くの場合孤立していた。人づき合いは決して悪くはないのだが、若い連中に取り巻かれて、有楽町界限を飲み歩くといったこともなく、社会部記者たちが幾つも造っている若々しいがさつな渦からは、いつも、遠くに離れていた。それに無口でもあった。そうし

た点、社の幹部からは彼が人を轄べる能力はないと見られていたようであった。

しかし、若い記者たちの眼には、そうした彼に何となく惹かれるところもあるらしく、毎年春秋二回の新聞休刊日に開かれる部の懇親会の席上などでは、彼の周囲には若い記者たちが一番多く集まった。こんな機会でない、このどこか一風変った不遇な先輩記者とはゆっくり語れないという気持もあったが、またそれとは別に、彼が内にしまつてあることなくネガティブな得体の知れない冷たいものに触れてみたいという無意識の欲求も働いていることは争えなかった。

二、三年前のことだが、彼はその宴会で、あとにも先にも一度だけ、自己の人生観のようなものを口走ったことがある。

「俺は小さい時、母親か女中か誰か知らないが、ある人に背後から抱きかかえられて、庭の隅の古井戸を覗いたことがある。ひどく深い井戸で、一面に羊歯が茂っているあいだから、底の方に小さく、水面が見えた。俺はそこに、小さな錆びた鏡でも置かれてあるような気がした。今ならなんのことはないが、なにしろ俺は七つぐらいたったろう。ぞつとしたね。怖いんじゃない。子供ながらにやりきれない気持なんだ。なんというか、こんな地面の深いところに鏡がある！ その時、俺の心の中に、

俺の人生にとって最も大きい関係をもつ何ものかが飛び込んで来たんだ」

飲めば飲むほど蒼白む性質で、いつも彼の場合、いっこうに酔っているのか、酔っていないのか見当がつかないのであるが、どうした調子なのか、そんな憑かれたようなことを口走って、その時彼は不意に立ち上がった。

そしてそのままふらふらと、横に彼を取り巻くようにして坐っていた若い記者たちのあいだに、横倒しに倒れ込んできた。みんなはその時初めて、彼がひどく酔っぱらっていることを知った。

「もし、そんなことがなかったら、俺は二十五の時友達の間を割っている。三十の時左翼運動に走っている」

それから、彼を抱き起こそうとする多勢の手を振り払いながら、

「三十五の時俺は女に惚れてる。四十にして市井に名をなしている」

嗚鳴ったのには違いなかったが、唄うようなふしぎな調子があった。戦前の学生が満州の歌を唄うような、感傷と慷慨のこもったもので、若い記者たちには一座の乱雑な話声や唄声にまじってそれが途切れ途切れに聞えた。無口な彼が、日ごろ心で思っていたことが、酔いの力を藉りて、一つ一つ、その吐け口をみつつけて噴き出して来たような、その時の感じだった。

その時の彼の言い方をもってすれば、幸か不幸かそうでなかったから、一切が彼はその反対だったということになる。実際、彼は常に、ある意味で、怠惰ともいえず、無気力ともいえた。少なくとも、人生に対する受身の、その傍観的な姿勢は、もはや彼の身についたもので、終生彼から取り去ることはできないもののように見えた。

しかし、そんな、新聞記者としてのして行くようなタイプではなかったが、担当した仕事は投げなかった。仕事を追いかけてゆく執拗さは、派手ではなかったが、やはり今の駆け出しの記者のまねてできないものがあつた。満州事変当時、記者生活を振り出した古参記者だけの持つ、修練から得た粘りが、自ら努めなくても身に着いていた。

「どう、やってみないか」

と山名から言われた時、速水は返事は口に出さず、煙草を口に銜えたまま、二、三度、無造作に頷いた。速水にすれば、山名の気持は暖かく感じられたが、しかし、それを押し戴くほどの大した感慨があるはずのものでもなかった。

その夜、宿直の記者たちのほかでは、速水と副部長の石井が泊ることにして、山名も他のデスクも、多勢の記者たちも、みんな終電車で家へ帰って行った。

速水は五階の宿直室にはいると、窓際のベッドを占領して横になったが、なかなか眠れなかつた。下山総裁の行方不明事件も事件だが、それに関する何ごとも起こるうとは考えられなかつた。この事件の発生を耳にした時、ふと心を感じたあの陰惨な暗い蔭はいつか消えて、なにかひどく他愛のない事件のような気がして来た。明日の朝になれば下山総裁は彼も一度行ったことのある池上の自邸へちゃんと帰宅して、いそうな気がして、社の連中も、少々神経質になり過ぎていのではないかと思われた。

佐竹景子の肩を固く結んで、顔を横にそむけた固い印象に、速水はいまも拘泥していた。宿直の記者たちの寢息があちこちから聞えて来る宿直室の狭い闇を見詰めたまま、速水は、景子と沼津の千本浜で別れてからまだ五時間とは経っていないことを改めて頭の中で計算した。そして今や自分の人生において、全く新しい一つの色彩を持った時間が流れ出していることを感ずるのであった。思いがけず自分の心に生れた景子への愛情を、誠実に、真摯に育てて行こうと思う。はなやいだ気持はなかつた。強いていえば、くろい潮の流動する中に、時折り隠顕する青い藻の動きを見詰めているような、暗い、しかし静かな、それはどこか祈りに似た感情だつた。

速水がほとんど二十年ぶりで、新聞社に訪ねて来た佐

竹雨山に会つたのは昨年の五月であつた。正午を過ぎて間もないころ、面会があるというので、速水が表玄関の受付まで降りて行くと、初めはちよつと見違えたほど老けた雨山が、先方はすぐ彼を見つけて、階段を降りて来た彼の方へ、老人とは思われぬ若々しさで、よおと、声をかけながら近づいて来た。芸術家というものの磊落さを、速水は中学時代に、その図画の教師をしていた雨山によって初めて知らされたのであつたが、茶色のレインハットを頭に載せ無造作に背広を着ている恰好といい、挨拶ぬきのざっくばらんな話し方といい、二十年後の今日も変わらず、雨山は不遇で清潔な老画学生といった感じだつた。

「早速だが、今日は君に厄介な話を持ち込んで来たのだよ」  
と、その時雨山は言った。

まあ、お茶でも飲みながら、ゆっくり伺いましようと、速水は老旧師を社の近くの喫茶店に連れ出し、そこで彼の要件を聞くことにした。美味い珈琲屋を選んだのだが、雨山は珈琲にはほんのちよつと口を付けただけだつた。

「ばかなことだが、僕は一生をかけて色彩の研究をやつてね。今年満で六十だから、ちよつと四十年やって来たことになる」

銀色に光る白髪を、雨山は、若い者がするように、時  
時手で背後に撫でつけながら語った。

それを最初思い立ったのは美術学校を卒業した年だとい  
う。それから今日まで、佐竹雨山は中学の図画の教師  
をしている時もそしてそれをやめて土地の二、三の学校  
の嘱託よこたくになつてゐる現在も、その傍ら一貫して色彩の研  
究に没頭して來ていたのであつた。

「色彩の研究といつても、詳しくいえば、僕のは、日本  
色彩文化史の研究というのだがね」  
と雨山は言つた。

速水には全くの初耳だつた。静岡県の東部の、夏期だ  
け東京の植民地のような小さな避暑都市の中学校の  
校庭で、生徒に写生をやらせながら、自分は両手をズボ  
ンのポケットにつつ込んで鉄棒の向うのクローバのいっ  
ぱい生えている草原をぶらぶら歩き廻つたり、あるいは  
そこに腰を降ろして、終業の鐘の鳴るまでは立ち上ら  
ないでいたりする、他の教師とは一風変つたずぼらな雨  
山の書生つぼのような姿が、速水の知つてゐる二十年前  
の佐竹雨山のすべてであつた。迂闊まがなことですが、知り  
ませんでしたね、と速水が言うと、

「知らんだらうよ、君の時代の人は。あのころはまだ僕  
の仕事が海のものとも山のものとも解らんころだつたか  
らね。しかし、あのころでも、君たちには悪いが、図画

を教えるのはいい加減にして、僕の頭の中は、色のこと  
ばかりだつたさ」

そんなことを話しながら、時々速水の方に向ける雨山  
の眼は実に美しかった。心の穏やかな美しい人がらが、  
いつも笑つてゐるような二つの小さい眼から感じられた。  
老年までこんな邪氣のない美しい眼を持ち運んで來た人  
に、速水は初めて出会う思いで、老旧師の人がらを改め  
て見直す気持だつた。

「お願いといふのはほかでもないが、その僕の『日本色  
彩文化史の研究』といふのが十二部から成つてゐるが、  
それを三冊ぐらゐに分けて出版してくれるところはない  
かと思つてね。君が新聞社にゐるので、一応、まあ、口  
だけかけておいてみよう、今日話を持ち込んで來たま  
でのことさ」

速水の負担にならぬようにとの思いやりからか、雨山  
はそんな言い方をした。その時彼は全巻の目録と原稿の  
一部を持参してゐたが、全くそうした方面に門外漢の速  
水には、老旧師の生涯をかけての研究といふものが、い  
かなる価値を持つものか判断の下しようもなかつた。

その日は、原稿の一部を預かつて、速水は雨山と別れ  
た。終戦直後の異常な出版好況期が終つて、出版界はよ  
うやく整理期にはいつてゐた。戦後の新興出版社も、大  
資本を抱えている老舗も、徐々に迫り來る大不況時代を

乗りきろうと、文字通りの死闘を展開しようとしている時であった。速水は心安い二、三の出版社に、佐竹雨山のライフワークたる「日本色彩文化史の研究」の話を持ち込んでみたが、もちろん相手にされようはずはなかった。また速水としてもそれが相手にされようと思つての持ち込みでもなかった。もし、かかるものに眼をつける奇特な出版社があつたら、その時は出版社の方から改めて雨山にあつて貰い、その上で雨山の研究が出版するに足る価値を有するか否かを、改めて判断して貰おうというはなはだ自信のない気持でもあつた。

速水が雨山から預かつている原稿の一部を鞆に詰めて、沼津の香貫山かぬきやまの麓かたもとの彼の家を訪問したのは、十月も末になつたころであつた。半年近く預かりつばなしにしていた原稿のことが時々思い出されて前から気になつていたので、ちょうどその前の晩、高等学校時代の親しい仲間が五、六人熱海で集まることになり、彼もそれに出席するはずであつたので、どうせ熱海まで行くなら、いつその機会に、その翌日ちよつと足を伸ばして、沼津の佐竹雨山の家まで原稿を持参しようと思ひ立つたのである。

沼津の街を外れて、静浦へ行くちよつと中間ぐらいの地点に、佐竹雨山の家は背後になだらかな香貫山の小丘陵を背負つて、旧街道からちよつとはいつたところひ

どくひつそりとした佇たずまいで建つていた。人通りの少ない街路から二、三段の小さい石段を登ると、そこは両方生垣で挟はまれた細い路地になつていて、それが奥まつた玄関に通じていた。その路地を通つて行く時、縁側で籐椅子とうすに腰かけている着物を着た雨山の姿が、生垣のあいだから覗かれた。

三間か四間のこじんまりした平家であつたが、いかにも雨山らしい清潔な感じの構えで、掃除の行き届いた小さい玄関の三和土たつきに立つて、物音一つ聞えない静かな冷んやりした家内の空気に触れた時、速水はもう何年か自分が忘れていた人間が生きている場所としての住居すまいというものを思い出した。遠い昔ではあるが、かつて確かに、自分はこうした場所に置かれ、こうした場所で生きていたと思つた。

彼は大学を卒業してから十何年、眠る場所としての部屋をしか持つたことはなかつた。死んだ妻のはるみと三年ほど大阪の郊外で家を持つた経験はあつたが、その時代は小さい夕刊新聞社に勤めていて、朝から晩まで忙しく駆け廻り、ほんとに眠る時だけ家へ帰るといふ状態だつた。その後K新聞社に転じたが、そのころからあとは今日までずっと独身生活が続き、アパートや下宿を何十となく転々として暮して来た。転々したといつても彼の場合ただベッドの置き場所が変わつただけの話だつた。眠

るためにのみ彼は毎晩自分の部屋に帰って来た。そうした彼の場合は異例だとしても、社の同僚のたれもが、佐竹雨山の営んでいるような家を決して持つていないことを、その後、雨山の家を繁く訪れるようになってから、速水は時々感ずるのであった。それは新聞記者の自ら気づいていない哀れさのようにも思え、さらに広く、都会の勤め人のすべてが遅かれ早かれそうなるべく現代社会の持つ一つの宿命のようにも思えた。

ともかく佐竹雨山は、家庭を持ってから今日まで四十年、妻の増代と一人娘の景子と三人で、この一つの場所で食べて、眠って仕事をして来たのであった。ここで悦び、ここで悲しみ、ここで怒り、ここで人間として生活して来たのであった。短い家庭生活の破綻からそれに続く今日までの荒涼とした磧を歩き続けて来た速水には、初めて遠く忘れていた故郷を思い出したような驚きが、佐竹雨山の家庭にはあった。

雨山は小さい中庭の見える八畳の書斎で、自分の研究の内容を速水に説明するために、時々立ち上がって行つては、書物を持って来たり、戸棚を開けて資料を整理してある幾つかのボール箱を持ち出して来たりした。速水がこれまで見て来た学者たちの書斎や研究室とは全く異なっていた。大型の本箱が一つと小さい机が一つ清潔に置かれてあるだけで後は何もなかった。必要な書物以外

は、一冊の余分の書物も雨山は貯えていないようであった。

しかし、整理カードやノートは門外漢の速水がみてもみごとであった。古事記、日本書紀から六国史、扶桑略紀、百鍊鈔、本朝世紀、栄華物語等の歴史の大筋から万葉集、懐風藻、古今集を初めとする各種の勅撰和歌集、それから竹取物語を筆頭に平安朝以降の物語文学、さらにはまた大宝令、延喜式、類聚三代格、法曹至要抄、政治要略等の諸全集、さては公卿の日記類に至るまで、あらゆる史籍古文書類から、およそ色に関する個処はことごとく抜萃され、それがそれぞれの目的のために整理分類されてるのであった。

雨山に言わせると、色彩は人間生活の鏡といつていいほど人間生活と密接な関連を持ち、立派に文化の一要素として、文化の一面を荷担している。ここに色彩文化史としての研究が成立する。自分の研究の中で、多少とも誇り得るものがありとすれば、それは古代の色彩の復元研究である。古代日本人の生活と密接な関係のあった色彩の真相を捕捉しようとしたことである。色彩に対して古代人が持った精神内容を知るためにも、さらに広く古代人の心理生活、古代の社会心理を知るためにも、古代の色彩の真相を掴むことは絶対に必要なことである。いふまでもなく、古代の色相は、古代の染色法によって把

握するほかはない。これに何十年かの歳月がかかつてしまったという。

「蘇芳染という色があるね。これ一つだって復元すると、なるとなかなか困難だ。もちろん、蘇芳で染めたのだが、この蘇芳を探し出すのが容易ではない。今、日本では、春、葉の発芽前に豆のような花を咲かせる灌木を蘇芳と呼んでいる。通常たれでもこれの花か木皮で染めるのが蘇芳染と思いやすが、それは違うんだよ、君。古代染料の蘇芳は、そのころビルマ地方から輸入した喬木の材を細かい屑にしたものさ。また丁子染にしても、いま日本にある例の、春、芳香を放つ丁子とは違う。これは当時南洋から輸入した喬木の花の蒼を使つたんだ。紫草とか、椽とかいろいろあるが、いずれも名称は同じでも古代と現代ではその実体がまるで違う」

雨山は、四十一年の研究歳月の何分の一かを染料と媒染剤の決定に費し、ようやくこの問題を片付けると、今度は染色の手法と操作の困難な問題に逢着した。唯一の手がかりは延喜式だが、それには染料、媒染剤、顔色剤の用量の記入はあるが、操作の順序、手法については全く触れていない。一種の染料で一つ色相を染める場合はまだいいとして、二種の染料を用いる場合は、二種の染料を混合して染めるか、重ねて染めるかが判らない。結局一つ一つの染料の性質を知って、そこに合理的な方法を

見出す以外仕方がない。そこで雨山は半生の大部分をかけて、おのおのの染料に当時用いた媒染剤のそれぞれを作用させてみて、それがいかなる現象を呈するかをみる。労多くして功少ない実験と取り組んできたのだという。

「一つの植物体から色素を抽出するまでも長い歳月がかかる。ただ煮ただけでは出ない。紅は紅花という草の花弁から採るんだが、その工程操作が厄介だ。山形県の出羽村から種子を持って来て庭で栽培して、それを加工して最後の製品を造るまでには六年かかった。藍も六年ぐらいかかっている。紫草は岩手県から種子を探し出して三年くり返して失敗し、次は根を宮城県から移植したがこれも失敗、発芽したが中途で枯れてね」

雨山は世間話でもするような調子で、そんなことを語った。そうした話は聞いていて、速水にも面白かった。雨山が話をしているあいだに老夫人がお茶を運んで来た。

「大変なお道楽でして、おかげで私も一生染物屋さんを手伝わせられましたね」

雨山と同年配の、質素な身なりの夫人の笑顔も雨山に劣らず美しいものだった。

「藍が立つようになれば紺屋も一人前だといわれるそうですが、どうやら私も一人前になりました」

そんなことを夫人は言った。染料の抽出に最も適当な



度合いの検出が難しくて、藍の場合はテストを何百回も繰り返したと、傍らから兩山が夫人の言葉を説明した。そして夫人は速水の方を向いて、兩山は庭の方を向いて、二人はめいめいの姿勢で、同じような静かな声を立てて笑った。

話が一段落すると、

「じゃあ、ひとつ製品をお目にかけてようか」

と、兩山は立ち上がって部屋を出て行ったが、しばらくすると、種々の色彩に染め上げた布の巻物を両手いっぱい抱えて戻って来た。そしてその兩山の背後から、これまた同じようなものを持って現われたのが景子だった。

「僕の娘だよ」と兩山は言った。

景子はその時黙って挨拶したが、顔を上げしなに見せた笑顔が母に似て清純な感じだった。

兩山の口から、紫とか茜とか紅花とか、あるいは芫荽、黄蘗、藍、大青、そうした言葉が飛び出すたびに、景子はそれに相当する色彩の布を抜き出して、その布の束を速水に手渡したり、着物の柄の品定めでもするように、ちょっと自分の肩の辺に翳してそれを速水に見せたりした。

「どう、綺麗だろう！」

と、兩山が言った時、景子は白樫の樹皮を鉄で媒染して

染め上げたという黒色の布を肩から胸へ掛けるようにして支えていた。枕の草子に、二位三位の袍を、しらかしで染めたと出て来るが、これなんだよと、兩山は言ったが、なるほどそう思ってみると、品位の高い深い黒色であった。その黒色のせいも、景子の化粧してない顔の白さが薄暗い部屋の空間に浮き出て、綺麗だろうと言われた時、その言葉が景子を指して言われたのではないかと思ったほど、景子の顔はその瞬間、速水の眼にはむしろ生き生きと上気したような美しさで映った。

その日はほんのちよつと思つた訪問が、兩山に引き留められて、夕食まで御馳走になり、結局速水は夜の汽車で東京へ帰った。

このことがあってから、速水は時々暇を造って沼津まで出かけ、佐竹兩山の家を訪れるようになった。肝心の「日本色彩文化史の研究」の出版は、その後速水もさらに知り合いの大学教授の紹介状を貰つたりして二、三の大出版社にも当たってみたが、いずれにせよ、そういう特殊な出版は、出版界の混乱が落ち着くまではてんで話にならないらしく、結局は二、三年先までそのままにしておかねばならぬ四圍の状況のようだった。

実際、佐竹兩山の仕事が生世に出るためには出版社の大きい理解と損得を度外視した犠牲的精神がなければ望み得ないことであつた。兩山は自分が半生をかけて染め上